

地域の独自性大切に

備前焼を世界に発信



世界一長い焼き時間

備前焼の特長は、釉薬（表面にかけるうわぐすり）を使わず、およそ2週間高温で焼き締める焼き方にあります。そのため、非常に素朴で力強く、土の質感がそのまま伝わってきます。昔に比べ、焼く時間は短くなったとはいえ、これほど長く焼く焼き物は世界中どこを探しても他にありません。土は備前地方の山から流れて沈殿した粘土層で、有機物が多く、本来、焼き物に適していないかもしれません。それでも、備前の地では、先人たちの時代から、土に合った焼き方を徹底的に追求し、魅力ある焼き物を生み出しました。この有機物のような「不純物」も、生かすことができれば個性になります。素材の持ち味を生かす技術をつくり出すことが大切なのです。

備前焼の焼き色は、よく偶然の産物のように思われますが、土質や焼き方、温度などで全て計算されています。釉薬をかけず焼き締めだけ、という作り方なので、窯が作品に与える影響は非常に大きく、私は構造の違う四つの窯を使い分けています。

伊勢崎 淳 ISEZAKI Jun

備前焼の重要無形文化財保持者(人間国宝) × 岡山大学教育学部卒

2002年、新首相官邸の陶壁を備前焼で制作。近年は国内に限らず欧米など海外でも毎年展覧会を開く。「3年先まで予定が埋まっている」という多忙なスケジュールの中、今も制作を続ける。



- いせざき じゅん (75歳)
- ▶1936(昭和11)年 岡山県備前市生まれ
- ▶1959(昭和34)年 岡山大学教育学部特設美術科卒
- ▶1978~1987(昭和53~62)年 岡山大学教育学部特設美術科講師(陶芸)
- ▶1998(平成10)年 岡山県重要無形文化財保持者に認定
- ▶2004(平成16)年 重要無形文化財保持者(人間国宝)に認定



視野広がった大学時代

岡山大学特設美術科(1953年4月設置)ができてすぐのころ入学しました。東京や京都の美術学校に行きたかったのですが、経済的なこともあり、自宅から通える大学を選びました。特設美術科は高等学校の教員養成目的に設置されたので、陶芸だけでなく、絵画や彫刻、染色といろいろ勉強しました。今思うと、視野を広げる良い経験になりました。サークルは馬術部に。京都大学との対校試合で落馬したのがいい思い出です。

育った環境から作家に

卒業してすぐ備前焼の作家になりました。この道に進んだのは、育った環境によるところが一番大きいです。小さいころから父が作っていたのを見ていたし、遊び場の山にある窯から出てくる焼き物や破片に触れて、親しんでいました。備前焼は生活の一部になっていました。技術についても、特に誰かに教わった実感はないのですが、小さなころから窯焚きや

改革の連鎖こそ伝統

物を作るのは楽しく、できあがったときの喜びは大きいです。まして、私は生まれた地でずっと過ごし、風土の中から生まれた備前焼を作らせてもらっており、作家としてやりがいを感じます。近年、外国でも釉薬を使わない焼き物が注目され、多くの人が備前に勉強に来ています。地域を大事にすることは、国内はもちろん、世界に向かって発信していくとき、必ず武器になります。ここにしかない、という独自性を武器にすることは非常に大事なことです。

備前焼には千年近い伝統がありますが、伝統とは、昔のものを守るだけではありません。今を生きる者の現代的な感性や創造性を加えて新しいものを生み出していくこと。そういう改革の連鎖が伝統になるのです。「常にその先頭で新しいものを生み出していく努力が大切」。そう思いながら制作活動が続けています。